

## 特集

Eメールで対談

### 続・パソコンって何だ？

参加者

平野秀秋(法政大学社会学部教授) hhirano@mt.tama.hosei.ac.jp

URL=<http://prof.mt.tama.hosei.ac.jp/hhirano/>

渡辺潤(追手門学院大学人間学部教授) juwat@res.otemon.ac.jp

URL=<http://www.res.otemon.ac.jp/juwat/>

服部秀夫(ホームエコノミカ編集人) hhattori@a1.mbn.or.jp

こんな特集を思いついたがためにパソコンを購入し、Eメールをマスターしなければならなくなった服部秀夫。硬派の辛辣な発言を心がけながらも、スキャナーやCD-ROMの購入で財布が軽くなることを嘆く平野秀秋。そして、ミーハーの役回りでアダルト・ページの探索や自前のホームページ作りを吹聴する渡辺潤。三者三様のメールが醸し出す奇妙な鼎談の世界。その第2弾。今回の話題は、ずばりはやりのインターネットです。

#### @電話とEメール

服部: 今度のテーマはインターネットやマルチ・メディアということで、ちょっと私の手に余りそうです。そこで前回言い残したことから始めます。私は平野先生、渡辺先生からご指摘を受けるまで、Eメールは300字以内と思いついていたので、何となく半端なことしか書けませんでした。そのくせ300字はいつも大幅に超過していたのですが、パソコンって結構寛容なんだな、と勝手に思っていたんですね。

そこで本論?に戻ります。メディアの最小

単位は、対面による会話だと勝手に思い込んでいるものですから、メディア(マスも含めて)というテーマを振られると真っ先に電話のことが頭に浮かびました。メディアを単にコミュニケーションの手段と考えていましたが、どうもそれだけではないらしい。(思えば、初めて渡辺先生の研究論文を見せていただいた時のテーマが「電話」でしたね)

電話は最も素朴なメディアだと思っていましたが、どうもそうではないらしい。若い世代の長電話が時々話題になりますが、あれって明らかに、電話の元々の機能とは違うことに利用されているようにみえます。そこでは

電話は情報伝達的手段ではなく、ある種の娯楽として用いられているわけです。

いつの事かわすれましたが、小学生と大学生とでは電話の一回あたりの利用時間がまるで違うという資料を見たことがあります。小学生5分に対し大学生は30分とか。電話で30分もかかるような用件はちょっと考えられませんから、これは子どもと大学生では利用する意味が違うのだと私は考えました。ニューメディアのニューにはこのような意味も含まれているのでしょうか。メディアを使う人間がその性格を変えてしまうこともありうるんですね。

もう一つ感じていることは、電話は音(声)と音(声)の交換ですが、電子メールはまさに文字と文字の交換ですね。まさかそれを退歩なんていうつもりはありませんが、何となく先祖帰りの感じが私にはします。いっぺんに多方向に送れるとか、機能の性格がまるで違うことは前回でよくわかりましたが、ユーザーがまた新しい利用の仕方を発見したり、娯楽性を見つけたりしてメディアとしての性格を変えてしまうことはないのだろうか。

この企画の進行中、私は、ハイテクノロジーを「工場見学」ではなく家庭のなかで多分味わっているのだらうと思います。パソコンの功績の最たるものはテクノロジー社会を家庭レベルまで普遍化したことだらうと今の私は考えています。

<HTML><HEAD><TITLE></TITLE></HEAD><BODY></BODY></HTML>

平野：さて、今回の服部さんの問題提起は渡辺さんが大論文をお書きになりそうなテーマですので、それが来ないうちに主として技術的な方面に関連し若干お答えします。それにしても服部さんの問題提起は毎度手厳しいなと感じ入ります。ぼくなりには要約すると、

問題点は次の二つになるでしょうか。

- 1) テクノロジーは本来の意図と違った使用のされ方をする。これについてどのような問題が考えられるか。
- 2) コンピュータの進歩は文字を扱いやすくするという、いわば「先祖帰り」のような側面があると考えられないか。

はじめの問題から述べます。コンピュータの発明の「本来の意図」は何であったか、というのはそれこそ大歴史研究書でないと扱えないようなテーマですので、これに関する明言は、率直に降参します。それも悔しいので一つだけ付け加えると、その後今日のように進んだ動機は二つでした。一に軍事技術であったこと、二に金儲けの種だったことです。立派な動機だったといえるかどうか、これも判断を保留させて下さい。

意外な使われ方をする、という場合に二つのケースがあります。ユーザー自身が目的を持って、関係者がどう言おうがこの所期の目的に使えるようにすることが第一です。第二は服部さんの例示された「大学生の長電話」のように、うかうかとそうになってしまう場合です。ぼくはすでにお分かりのように硬派ですから、もちろん前者を理想とし、後者には多くを期待できないと考えています。

次の、最終的には文字が重視されるという、一種の先祖帰りが起きないか、ということに関してはぼくはその通りですとお答えします。パソコンにとってはワープロが基本です、ということはすでに繰り返しお話ししました。ネットワークに関しても、前記の例からもお分かりの通り、もともと論文を公開し迅速な検索を可能にしよう、という発想から出現したのですから当然ながら文字がもっとも重要なのです。多くの識者はすべて、インターネットは主として迅速で確実なメールの

交換のためにあると考えています。それ以外の目的は、いってみれば派生的なものにすぎません。万人が発信者になれる、という趣旨からいっても当然ですが。文字は人間の思考の塊として文化のなかに沈殿してゆくものですから、文字が重要でなくなる文化など想像することも不可能です。

ではマルチメディアというのはどういうことだ、とご質問があるかもしれませんがひとこと付け加えます。コンピュータ上では文字も映像も音も動画も、結局は0と1の規則性を持った配列ですから、文字が送れるなら映像その他も0と1の信号に置き換えれば送れるのです。ただし、文字や音声と比較すると画像や動画は100倍から1000倍の電送速度を要求されます。つまり大きな社会的資源を要するということです。それでも、米国のゴア副大統領などが提唱している光ハイウエーなどのように、なんとかもっと市場を拡大したい企業集団と、軍需産業が要らなくなったら景気対策の投資先を何にしようかと案じている政府の思惑とが重なり合ったりして、この方向はきっと止まらないだろうと思います。そうなったら、このハイウエーを何に使いましょうか。テレビ電話ですか。テレビ会議ですか。まあ、そうなったらなった時のことにして、それまでにパソコンを自家菜籠中のものにしておこうではありませんか。

しかし現代テクノロジーというのは妙なものです。何に必要かわからなくとも技術だけは進むのですから。あとから需要が作られる、ということですね。と、そんなことをいながら、ぼくも近日中に某メーカーが安価に発売しはじめた「35mm フィルム」専用のスキャナーを買おうかと思っているところです。これって貴重書などのマイクロフィルム版をパソコン上で読むのに便利そうですよ。

便利といえば、ぼくのパソコンは音源も動画も故意に外してある代わりに、6連装のCD-ROMリーダーを接続して、もろもろの辞書類を搭載してあります。『現代用語の基礎知識』などもさることながら、もっとも重量級は『世界大百科辞典』、『オックスフォード英語辞典』、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』の三つでしょうか。三点とも書籍版では大型本で20冊を越えるものですが、CD-ROM各一枚で、ものすごく便利です。パソコンなんか存在しなかった1960年代から、ヨーロッパでは書籍の電子化が嘗々と積み重ねられてきました。このような問題にもっと目を向けないと、日本の文化も良くならないかもしれませんですね。パソコン一家一台に、こうした重量級文化遺産が搭載されるかあるいは接続されるとよいですね。繰り返しになりますが、その時にはこれはこうして使うものだ、というのは親が教えるべきでしょうね。

<BGCOLOR="#CoCoCo" TEXT="#000000" LINK="#FFFFFF">

渡辺：服部さんのメールには、メディアは単なるコミュニケーションの道具以上のものではないのか、あるいはメディアが人間や人間関係を変えてしまうものではないのか、という指摘がありました。

手短かに用件を伝える道具として使われていた電話が、オシャベリを目的に使われるようになった。その変化に興味を覚えて電話論を書いたのは、もう十年も前です。電話はその後さらに進化して、現在では携帯電話が大流行です。ぼくは持っていませんが、学生の間にはかなり普及していて、授業中に「チリチリ」と鳴って中断することが何度もありました。電車に乗っても、道を歩いてもよく聞こえてきます。他人の中でいきなり道具とオシャベリしはじめる光景は、なんとも

奇妙だし、迷惑に感じることも少なくありません。ぼくには恥ずかしくてとてもじゃないけどできませんが、やってみたら案外楽しいのかもしれないかもしれません。車に乗っているときにも、ときどき電話片手のドライバーに出会いますが、そんなときには避けて通るようにしています。少なくとも、誰もが使いなれていない現状では、酔っぱらい運転や暴走族と同じぐらいこわい存在です。

それから、ポケベル。営業マンの首にかけられた鎖のように感じられて、いやな道具だな、と思ってきましたが、女子高生の必需品になってしまったのには驚きました。よく知りませんが、単にピーピーならすだけではなく、お互いだけしかわからないような暗号を工夫して小さな液晶板に届け合うのが楽しいのだそうです。ぼくの知っている大学院生が去年、そんな携帯電話やポケベルを材料にして、「移動体通信論」を書きました。彼によれば、今は基本的に、みんな寂しいのだということになるようです。

服部さんの指摘のように、Eメールには「先祖帰り」といった側面があるように感じられます。活字文化に慣れ親しんだ人間には電話よりはるかになじめる道具ではないかと思えます。けれども、そもそも人間は文字の読み書きをする以前にはことばを話し・聞くということだけで、はるかに長い時間生活してきたのです。その意味では、電話の方が本当の先祖帰りなのかもしれません。こんなふうにとらえると、パソコンについて考えるのは、結局人間のコミュニケーション全般について考えることだということになるのかもしれない。

ことばの発明、それが声の文化だけでなく文字の文化になったこと、さらに文字が活字となる。そして、電話やラジオ、写真や映画、

さらにはテレビの登場となります。その延長線上にというか、その果てに、今、パソコンが浸透しはじめようとしているわけです。活字から視聴覚のメディアへの移行に伴うさまざまな変化についていち早く指摘したのはマクルーハンですが、ぼくはパソコンをもっと長いスパンの中でとらえることが必要だと考えます。映画が登場して百年、ラジオが80年ほど、そしてテレビも半世紀を越える時間を経過しました。

#### @インターネットについて

服部：もう一回電話の話を見せてください。東京経済大学の田村紀雄先生の調査レポートで、詳細は語りきれませんが、要するに岐阜県のある山村の70年間の変遷を電話を中心に、調査したのですが、昭和3年に1台しかなかった電話が、現在はもちろん各戸に設置されているわけで、そのことと村民の生活の変化に係わりがあったかなかったか、というものです。この調査ではどうやらあるらしい。研究調査の部分はさておき、私が感じたのは、今まで存在しなかったものが、突然家庭に入り込んでくると、人間はどうやら、それを意識したビヘイビアを本能的にとるらしいということです。この調査には、当初は村内の知人同士の間でしか使われていなかった電話が、次第に区域を拡げていく様子が統計的に示されています。(もちろん全国的な規模で電話回線が拡大されていくことと関連していますが)。

これって、今まさにパソコン通信が早い速度で拡大している状況ととても似ているように思えるのです。平野先生から、何かフォーラムを選んで参加せよ、とお勧めを受けましたが(目下は技術的にムリです)見知らぬ

同士が、同じ場面で語り合えるなんて、つい数年前の私にはとても信じ難いことだったわけです。電話の場合は、商品の発注先を広げる、といった実用的な形で利用範囲を広げていきましたが、パソコン通信は、もっと人間くさいというのがビギナーの私の感じでした。

インターネットが騒がれていますが、世界の情報がどこからでも、誰からでも入手できるという言い方ばかりされているようですが、私には、世界の誰とでも、いつでも語り合える（かもしれない）ことの方がより感動的です。少し慣れてきた分、少し生意気になって、最近では、無機物のはずの我が家のパソコンに血が通い出したように思えてきました。

<FONT SIZE=3 COLOR="#000FF00"><B><I><U></U></I></B>

平野: amazon.com というインターネット本屋がシアトルにあります。この所在（正確にはURL）を、ぼくはある友人から教えてもらいました。ちなみに、ぼくはまだその友人とは会ったことがありません。この方ともインターネットを通じて知り合ったのです。

でそのamazonですが、ここは公称100万冊の書誌検索情報を提供し、完全オンラインで発注・購入できるという場所で、いわゆる本を眺めたり立ち読みしたりする本屋とは違うようです（ようです、というのはシアトルで確認したわけではないので）。その代わりにここにインターネットでアクセスすると、まずいわゆる平積みの本に相当するものがニューヨークタイムズ・ブックレビュー（米国では一番信用の高い書評です）その他の記事として詳細に「陳列」されています。そのページの続きの欄に、ちょうど買いたい本のジャンルや著者や書名のある程度の見当を持って本屋に入ってくる客の情景に警えると

本屋の少し奥の方に、きわめて強力な検索ページへのリンクがあります。ある程度見当がついている人は、関心のある検索キーワードをボックスに入力して探すのです。

ぼくは過日、試しに自分が最近専攻している17世紀の学者の名前を入れて検索してみました。専攻するくらいだから出てくる本は全部知っているはずだ、という「過信」のもとに。たしかに夥しくヒットした書名はほとんど知っているものでした。へー、この本まだ絶版でないのだ、外国は學術書を大事にしているらしいな、とその辺りまでは感銘を受けつつもまだ余裕があったのです。ところが、知らない本が2冊見つかったのです。研究者は、自分の専門分野で知らない本があるものすごく、なんといいましょうか、恥ずかしくなったり悔しかったり、早い話が「頭にくる」のです。

そこで、その知らなかった書名をクリックすると、出版年、出版社、著者……つまり書誌情報が詳しく1冊ごとに記載されています。もちろんぼくはそれらにマークを付けて発注しました。決済は海外ですからクレジットカードです。一度目の登録時に専用暗証番号を決めると、2度目からはその暗証だけで決済します。途中には「ギフトですか?」といった質問が現れ、ギフトなら包装紙と中に同封する言葉（「お誕生日おめでとう。貴方の誕生した年に書かれた名作をプレゼントします」など）を入力することができます。

ここまでのプロセスは懇切丁寧、ほとんど実在の本屋の、それもものすごく博識な店主を相手に購入しているような感触です。多分これから広がっていくインターネットショッピングのお手本になりうるのではないのでしょうか。シアトルですからもちろん目下は英文ページだけですが、ただし、これだけだと信

頼できる書店が一つ増えたというにすぎないとも考えられます。ところがこの本屋の傑作なところはこんなものではないのです。

第1に、ある著者のもの、こんな分野の本、などが出たら連絡してもらいたいといっておくと、電子メールで知らせてくれるのです。インターネットでありながら、町内の通いつけの本屋のような気がします。第2に、もし読者がその本にコメントを付けたくになったら、それを書き込むスペースもあるのです。「これを読んであの頃に帰ったような気がした」とか「そんな時代が自分の国にあったのを初めて知った」とかと、寸評が(もちろん記名、または電子メールアドレス付きで)掲載されています。

「この著者のいうことは間違っている」(まだ見つかっていませんが)というコメントがあったらどうするのだろうと思ったら、「私は著者です。コメントします」とか「出版社である当社がコメントします」という欄も設けてありました。ここまで来ると、この本屋さんのロビーかなにかで、客と著者と読者とが話をしているような雰囲気があります。日本流にいうとお風呂屋さん(銭湯)が本屋を兼営しているかのような。

服部さんがお書きになった中に、「新しいメディアが家庭に入ると対応するそれを意識したビヘイビアが人間にできるらしい」という意味のことがありました。ぼくも同感です。と同時に、それを徹底させて人間らしくして行くと、結局どんなメディアでもそれが成熟すると「基本単位は結局対面による会話」というところに戻っていくような気がします。だって人間がやる以上絶対そこに戻りますよね。その対話がインターネットを通じて海を越えていたということに、むしろ後から気づくのではないのでしょうか。どんなメ

ディア時代だろうが、人間が上等かどうか最後に問われる、ということだと思います。

<A HREF=1.html><IMG SRC=1.jpeg" WIDTH=50 HEIGHT=30>

渡辺: インターネットを使い始めて半年ほどは、おもしろくて病みつきになりましたが、楽しむのは大学だけに限定しました。一番の理由は、自宅では、インターネットにつないだ時間だけ電話料がかかることです。深夜の「テレホウダイ」といったサービスもありますが、それでも、まだまだ気楽に使えるような料金体系になっていません。周囲にも月に3万円使って驚いたとか、5万円を超えて怖くなったといった話をする人がいます。使用料としては、これはどう考えても法外なものです。何しろ、このお金はインターネットそのものではなく、その入り口に入るまでにかかるものなのです。どんなに使っても、1カ月にせいぜい15千円程度にしてもらわなければ、ぼくはとて家でも楽しむ気にはなれません。

今大学では、文部省の指導や補助もあって、大学間のネットワーク化がほぼ完成しています。前回の特集で書きましたように、多くの大学では、それに合わせてすべての研究室と教室にパソコンが設置され、学内のネットワークが動き出しました。教員も学生も、そして職員も、必要ないつでもインターネットに接続できる状況が整いました。大学はコンピュータに関してはずいぶん恵まれた環境にあるわけです。

で、さっそく、未知の世界に足を踏み入れることになりました。今回は、そのぼくのインターネット体験のプロセスや学生の行動から得た印象を書くことにします。大学でのインターネット利用は、もちろん研究目的ということになります。平野さんが書いていらっ



しゃるような関心がぼくにも当然ありますが、最初は、日本では法律で禁止されている「ハードコア」のポルノ写真をまず見てみたいという気持ちが一番でした。大学の教師が研究室で何をやっているのか、と言われそうですが、しかし、メディア論やポピュラー文化論を専門にするぼくには、それはりっぱな研究対象にもなるのです。そういう分野を選んだ判断に今さらながらに感謝(?)でした。

へーとか、ホーと驚いたり、年甲斐もなくてドキドキしながら感じたのは、インターネットは国境をまったく無にしてしまう通信手段なのだという思いでした。つまり、どの国にもその国独自の法律があり、それに違反すれば当然、犯罪行為として罰せられるのに、インターネットはそのような個性を考慮せずに情報を伝達してしまうという特徴です。あるいは、この種のページはたいがい有料で、その払いはカードです。VISAかMASTERでというものがほとんどで、その金額はたとえば、1週間で5ドルとか1カ月なら10ドル、1年なら30ドルといった程度のものでした。しかし、カード番号を教えるわけですから、ぼったくられる危険性がないわけではありません。何しろ支払いをする相手を信用する材料は何もないのです。本当はいくら払い落とされるのか不安でした。国の違い、具体的には法律や貨幣や言語の違いを越えたやりとりが瞬時のうちに成立して、しかもそこには個人的な応対がまったくないというコミュニケーション。これが、ぼくがインターネットに感じた第一のおもしろさ(あるいはこわさ)でした。

もう一つ感じたのは、これは学生に対してですが、予想以上の「英語アレルギー」という反応です。彼らは大学に入るのに英語の勉強をかなりしています。しかし、大学の授業

の中では英語が一番腰が引けているのが実状です。ぼくは外国語を使う必然性やおもしろさを知らないのが一番の理由だろうと思っていましたから、インターネットが、そのおもしろさを発見するきっかけになるのではと考えました。しかし、そのような期待は見事に裏切られました。モニターに英語がずらずら出てくると、彼らは「ワッ」と驚いて、すぐに別のところに逃げてしまう。これはぼくにとってはかなりショックでした。インターネットによって、ぼくは若い世代の中にある、言語の壁とメディアによって馴染んだ狭い世界への安住という特徴を目の当たりにさせられることになりました。

#### @ホームページを作ってみたら

服部：人類学者の今福龍太さんが、こんな事を言っています。私は彼の大ファンで、著作は全部所持しているんです。現代の日本の書店は、「情報の網羅性か、きわめて通俗的な商業性かの、どちらかの原理によってしか成立していなくなってしまっている。」例え大きな書店でも、もはや日本の書店は自分に刺激を与えるような環境ではない、ということ。そしてサンタモニカの書店を例にあげて、書店自身の持つ、世界情勢への鋭敏な目配りがいかに人間を刺激するか、と。(日経96年10月28日夕刊)

平野先生のメールを拝見して、私は不思議な感動に捉われました。(偶然にも同じ日に届きました)。今福さんは人類学者ですから、「その場に身を置く」ことを、原則としていますが、平野先生は、まさにネットワークの世界で、おなじ事を体験されているわけです。良き書店の伝統がない限り、amazon.comの経営思想は生まれなかつたらう、と考えま

す。インターネットは、その利便さ、情報のネットワークの大きさばかり言われていると、ビギナーである私は感じてしまうのですが、このような感動、刺激を感じることもできるのか。渡辺先生の学生さんたち、英語が出てくると別のところにアクセスしてしまうそうですが、私に言わせれば、ご心配にはおよびません。彼らはきっと心のどこかに刺激を受けているはず。きっと秘かにでも、語学の勉強を始めるでしょうから。

今回は感動だらけで、もう一つ、平野先生のホームページ(URLというんですか) 拝見した事も付け加えなければなりません。もっとも私が拝見したのはその一部、いちばんやさしそうだったので、No.4を選びました。A JOURNEYと題した芭蕉の句「蛤のふたみに / わかれ行く秋ぞ」が載っているページです。この句以外は、もちろん全部英文ですが、日本文字と英文の配列が奇妙に美しく感じられたのでした。このページを、渡辺先生の学生さんが見たら、彼らはきっとこの英文を読みとろうとするに違いありません。この句を完全に翻訳することはムリだと平野先生は(英文で) お書きになっていらっしゃるようですが、翻訳しなくたって、日本語の(日本文学の)奥深さは外国人にも感じ取られるのではないかと思います。

そこで今日の結論です。インターネットとは目下、それを見る人と使う人が歴然と分かれているのではないか。見るだけの人と使える人とは分かれていると言うのが正確だ、と知っている私自身がちょっと癪です。

<sound.html><BGSOUND SRC="Rock'n roll sound.midi" LOOP=4>

平野: 服部さんから小生のURLに関する過分のお褒めをちょうだいし、なんだか気恥ずかしくて数日お返事が遅れました。慧眼の編

集長が見破られた通りです。小生がひそかに自分自身に課してきた要求というのは、ご指摘の通り「現場に身をおくこと」でした。この点は、人類学者の今福龍太さんのおっしゃるスタンスと同じことです。

学者が現代のいろいろな現象を論じるとき落ち込みやすい罫があります。大学教授という肩書きがあるからまあ無意味ではないだろうと、評論をやると結構受けるのです。受けると、本人もこれが学者としての業績のように錯覚しはじめるのです。これは研究者として恥ずかしいことですし、本来の「評論」というものの持つ使命にも反することになります。ではどうしてこんなものが受けるかというと、これまたご指摘の通り「通俗の商業性」を追求する向きにとって便利だからです。ではなぜ「通俗の商業性」が成り立つかというと、「見るだけ」の人が営業のターゲットとして結構重宝だからです。

インターネットを成立させたのは商業性と関係ない必要があったからで、その必要とは1) CERNの場合は学者が論文をできるだけ迅速に探し出し交換することができるようにということであり、もう一つは2) 軍事的に、センターを叩かれれば全体が麻痺してしまう、ということがないような通信網を構想しようということでした。動機の是非は論じないことにして、このような必要が合体して分散ネットワークとしてのインターネットが姿を現したのです。半ば軍事技術を民生用に転換するにあたって、TCP/IPというプロトコルがボランティアに取り決められたのでした。

服部さんの指摘される「見るだけ」の人とはなんだろう、と強く感じます。かつてリースマンという社会学者が小さな仲間集団について書いたことの中に、ジャズが磨かれていくプロセスは優れた聴き手がいたことと切り



離して考えられない、という文章があります。日本の江戸の芸能なども実はそうでしたね。見聞きしにくる旦那方の鑑賞眼が怖くて芸人たちは息詰まる芸を身につけたのでしたね。どうも現代の「見るだけ」の人は人間という中身よりは流行という箱だけを見ている嫌いがあるようですね。

最近の日経夕刊に「ワープロ専用機復権か」という記事が載っていました。ひとところすっかり売れなくなったワープロ専用機が、「インターネット閲覧ソフトを組み込んで」各社から市場に投入されるそうです。実はこれ「商業的」理由がありまして、パソコン用のチップがそろそろ世代代わりの時期を迎えています。それもあって、パソコン市場が一頃より軟調になってきているので、余った（という用語がありますが）チップの生産能力の振り向け先が必要になりつつあるのです。どんなもので、売れるのかどうかなどまだ不明ですが「見るだけ」の人がまた増えるのでしょうか。

最後になりますが、服部さんが学生がいま英語から顔を背けても心配ないですよ。心のどこかで英語はやるものだと感じているのだから、というおっしゃった人間洞察に、ぼくも深く共感を覚えます。そのような学生さんが何割かはわかりませんが、この人間信頼がなかったら情報社会など百害あって一利なし、ということになります。だからこそ、「まず隗よりはじめよ」ということなのですね。

<UL TYPE="circle"></UL><OL TYPE="1"></OL><LI></LI>

渡辺：平野さんに刺激されてから、自前のホームページらしきものを公開するまでに3週間。それこそあいている時間のほとんどを注ぎ込むことになってしまいました。まさにハマってしまったわけです。前号に、多少居

直った気持ちで「言語」などわからなくてもパソコンは使えるし、そうでなければダメだと書きましたが、ホームページ作成の経験は、ぼくにとって「言語」のおもしろさを発見する機会になったようです。

ホームページはHTML(Hyper Talk Markup Language)という言語を使います。といってもいたって簡単で、<.....>というマーク(タグ)でくくってさまざまな指示を出す形式を基本にしています。たとえば<CENTER>と書く文字や画像が中央に配置されますし、文字の大きさは<FONT SIZE=?>、イタリックにするなら<i>とやればいいのです。専門家のようには書いてますが、ぼくは『ホームページの制作』(河西朝雄・雄一著、技術評論社)を買って、それを読みながら、それこそ試行錯誤でページ作りをやったのです。

そんな感じでも、単純な基本ページは1時間足らずで画面に映し出せるようになりました。ところが「何だ簡単じゃないか!」と思ったのが病みつきになりました。「表紙には『ようこそぼくのホームページへ』と書いたTシャツを描いて入れよう。」「ページを移動するボタンもイラストで作ろう。」「平野さんの英語だけが、ぼくは英語と日本語の二本立てで行こう。」略歴や著書・翻訳の紹介に、ゼミの卒業生の論文集一覧、ゼミの学生のページは彼らに任せて、後は最近関心を持っている「ポピュラー文化」のページ。それから.....と浮かんでくるアイデアはぼくの時間を湯水のように使いました。

こんな経験は久しぶりでした。夜が明けはじめた窓を意識朦朧の状態で見ながら、ぼくは、たとえば中学生の時に初めてガリ版をつかって発行した学級新聞を思い出しました。1966年から詩人の片桐ユズルさんが発行していた『かわら版』はすぐに「関西フォー

ク運動」になくてはならないミニコミになりましたが、ぼくはそれに載せてもらおうと、ボブ・ディランやその他のメッセージ・ソングを必死に歌えるように訳しました。あるいは、大学院生の頃には翻訳家の中山容さんと『赤ちん』というミニコミを出しました。『かわら版』にはコピー機、『赤ちん』には簡易式の漢字和文タイプと謄写ファックスが使われました。ワープロを買ってから、ぼくは『Newsletter』という個人紙を出しはじめました。途中からパソコンにかわり、ぼくの近況やそのときどきの関心事、それに子どもたちの作文やパートナーのエッセイなどを盛り込んで21号まで続けましたが、ここ2年ほど休刊状態になっていました。

思えば、ぼくがメディア論に関心を持った根っこには、小さなメディアに対する興味、それも受け手であるよりは送り手になることのおもしろさの実感があったのだと思います。ホームページは、そんなぼくが忘れかけていた関心の火種に油を注いだようです。

ぼくのホームページは大学内では初めてのものです。ホームページ作成のプロとして、あてにされるのはそんな先の話ではないかもしれませんが、技術的なことは、わかりやすく書いた入門書を一冊頼りにすれば、比較的容易にクリアできるのです。で、それをやっつけてしまえば熟練者や達人のように扱われる。「一時間でも早く知識を手に入れたり技術をマスターすれば、専門家や権威者のような顔ができる。」平野さんが指摘されているように「大学教授」という肩書きは、時に他人ばかりでなく、本人にも錯覚をもたらすことがあるようです。もちろんこれは、ぼく自身の経験にそって話しているのです。

英語のホームページにアレルギー反応を示す学生の話を書いたら、服部さんからは「彼

らも心のどこかで刺激を受けているはずだ」と諭されてしまいました。あるいは、平野さんには「この人間信頼がなかったら情報社会は百害あって一利なし」と書かれてしまいました。もちろん、わかっているのです。ぼくは高校のある時期に英語(というよりは勉強全般)嫌いになって、落第を何とか免れるという状態になりましたが、英語に関心を持つきっかけはフォークソングを訳したことでした。で、気がついたら翻訳書を出していたというわけです。だからこそ、インターネットを探索したり自分でホームページを作ったりするのは、学生たちにとってはいいきっかけになるのではと考えたのです。ちょっと刺激をして、目を輝かす学生が現れるのをじっくり待つ。何より反省すべきはぼくのせっかちでいらちな性格なのかもしれません。

#### @自己表現か露出趣味か

服部：お二人のメールをいただいた時、私はちょうど関西大学の木村洋二教授の論文「ソシオンとコミュニケーション」を読んでおりました。(亀岡の山奥の木村先生宅には、渡辺先生に連れて行っていただきました)とっても難解でしたが、一生懸命に挑戦してみました。「他者がその内部に構成した私の像(鏡像)を私は直接見ることはできない」「私の鏡像Abは、私が構成しているアナタである私のなかのサブソシオンBaのそのまた内部に構成されるのでなければならない。」れっきとした学術論文を自分流に読んでしまうなんて、ムチャな(危ない)ことですが、他者とのコミュニケーションの心理形態を、図形を交えて鮮やかに説明している(らしい)のです。他者が自分をどう見ているかは、対面コミュニケーションの場合でさえ、正確に

知ることはできない。とこの論文は言っている（またまた「らしい」）のです。

そこでホームページのことに戻りますが、渡辺先生が苦勞されて開かれたホームページ、つぶさに拝見させていただきました。Tシャツのマークは言わば渡辺先生のロゴですね。お二人ともメールの中で、大学教授というお立場が、過度の誤解を与えかねないことを自戒なさっておられますが、私は逆だと思ふのです。ホームページの世界は、拝見させていただいたようなものが、先ずリードしてゆくべきだと思うのです。それと、これは渡辺先生から直接（亀岡への車中で）教わったことですが、大学間の情報交換には実に有効だということ。その辺までは私でも有効性を想像できます。

どうしてこんな言い方をするのかと申しますと、私のところにも時々、ホームページを開いたから、という知らせが舞い込みます。多くは個人的（趣味的？）なもので、実はその都度思わず「何故？」と反応してしまうのです。個人の（趣味としての）ホームページには、「自分をこう見てほしい」という色彩が濃厚です（木村先生の論文を引用させていただいたゆえんです）。機械的には多数を相手にしているのに、発想は対面コミュニケーションなんですね。しかしインターネット上では、「私A」は「Ab」でさえ見ることは絶対にできないはず。だからナンセンス、とは決して言いませんが、ホームページってうっかりすると自分をさらけ出してしまう恐れがあるように思えます。さらけ出してもいい、あるいは示すべき何か、があればそれはいいと思いますが、便利さだけで、面白いだけで機械？を弄んではいけない。渡辺先生が「中に何を盛り込むべきかが大事」とおっしゃる通りだと思います。というわけでホー

ムエコノミカのホームページは先送りです。中身をもっと充実させる必要があります。

<FORM ACTION="mailto:juwat@res.otemon.ac.jp" METHOD="POST">

平野：今日、演習の時間に学生さんとの話がたまたまメディア史の中に位置づけたインターネットとでも言うべき問題になり、「20世紀のメディアは人間の劣性に訴えたものが金銭的に成功する歴史の繰り返しであった」というようなことを話し、インターネットもその繰り返しになる可能性はある、と述べました。だからそうならないようにしたい、というのが自戒の真意であることは理解していただけたと思います。ただし、だからその意図にふさわしいものを率先して示すべきだと指摘される論点に、この自戒は何の答えにもなっていません。それは反省します。

教室で上記のことを述べた真意は、インターネットはまだまだ新顔なのでメディアとしての汚染度がはるかに少ないから、みんな大事にしようよという意図でした。インターネットの良さは、またそこにホームページを開設する良さは、ひとえにここに懸かっていると存じます。個人的なことしか載っていないホームページを何故か「見て下さい」と言ってくる人も、週刊誌に原稿が載ったから読んでください、という人とは少し違うように思えます。

どこが違うかを整理してみます。ホームページ作りの特徴は、第一に手作り作業であること、第二にもかかわらず、それは極度の公開制を前提にしていることです。

第一の点は、根っからの手作り派である渡辺さんが、ぼくがハラハラするほど入れ込んでしまったことをまたきつと証言されると思います。パソコンのプログラミングは手作り作業です、とこれまで何回言っても芯からは

本気にしてくれなかった渡辺さんがこれほど夢中になるとは、ぼくには意外でさえありました。この手作りは、どんなものの手作りも持っている夢中にさせる面白さを持っています。ルアー作り、刺繍、木工、花壇、なんでも結構ですからご自分が最も気に入った手作り作業を考えて下さい。ホームページ作りはそれと全く同質のものを持っているのです。

おそらく服部さんが個人的なことに過ぎないホームページをなぜ「見よ」と言ってくるのかとおっしゃるのは、この第一の側面を認めないという意味ではないはずだと思います。そうとすれば、仰りたいのは第二の高度の公開制にそぐわないではないか、という意味だと思います。実はぼくも同感です。しかしだれかが「花壇を作ったのでぜひ見て下さいませんか」とお誘いをしたとき、服部さんはそのことには寛容なのではないでしょうか。ぼく自身は、インターネットにはこの意味での寛容さもあって良いと思います。少なくともマスコミに無意識に依存した週刊誌の原稿とは違うような気がします。もちろん全部の原稿がそうだとはいえません。

米国でクリントンが当選し、日本で第2次橋本内閣がスタートしました。米国の副大統領と日本の新文部大臣とは、ぼくの知識では情報インフラ整備の必要性に関して共通点があります。それもあって、賛否は抜きに、宇宙開発に次ぐような財政投資が情報インフラに向けられるでしょう。「20世紀のメディアは……」といったのは公共放送以外民間資金でした。だから許されるわけではないのですが、ぼくらの社会の建前として文句は言いにくいですが、しかしこれからの情報インフラははっきり税金です。

ぼくがインターネットに警戒的見方を変えなかったのは、この税金が上述の20世紀のメ

ディアの歴史を繰り返すことに使われるのは絶対避けるべきだと思っているからです。この意味では、趣味の世界が企業の利用によって、どけどけ俺たちは社会的にもっと意義のあることをやってるのだから、と押しつけられない方がよいように思います。個人のホームページが政府機関や大企業のホームページと同格だという世界は、それはそれでかつてなかった重要なことだと思います。余暇にホームページを作る人も、れっきとした情報インフラの税金負担者なのです。入り口は趣味でもよい。しかしそこからこの世界はもう一つの国際的公開性という特質につながっていることに気づいてもらいたいと思います。いずれ文字コードの世界規格ができるでしょう。趣味も世界中から見られるでしょう。

以上の見解は、冒頭のぼくたち学者とか知識人も趣味の世界に終始してよいと言うことにならない、という指摘を否定するものではありません。ぼくたちが第二の高度の公開制という特質に答えるものを構想すべき役割を持っていることは否定できません。

<BR><HR WIDTH=70% SIZE=100 ALIGN=right><BR><BR>

渡辺：服部さんはホームページの開設には、まだまだ慎重な姿勢のようです。「中身をもっと充実させてから」と。それと、個人が趣味的に出すページに疑問符をつけられています。

たとえば家族の写真をハガキにした手紙が時折やってきます。あるいは、友人や知人から自分が撮ったホームビデオを見せてもらう(見せられる)機会があります。送る(見せる)方にとってはもちろん、意味のある写真やビデオですが、見せられる側にとっては意味のない、従っておもしろくないものである場合が少なくありません。ホームページは、いわ

ばそれと同じ行為を世界中の人に向けてやろうとするものですから、服部さんのもたれた疑問はしごく当然のものでしょう。

しかし手作り作業のおもしろさ、表現することの快樂はまた、個人の権利として誰にも邪魔されたくないものでもあります。そして、作(創)ったものはどうしても他人に示し評価してほしいと思いたくなる。創作が一握りの天才や専門家の独占物ではないとする立場の普及。ここを認めないと、戦後のガリ版刷り以降のミニコミ、あるいは、街頭宣伝やビラ配り等々を評価できなくなります。自分史や詩集を出す人、出したいと考えている人がぼくの回りにも少なくありません。

インターネットへの関心は大学はもちろん、高校や中学も例外ではなく、ホームページ作りが授業の一つとして組み込まれはじめています。また寿命が延びて、子育てがすんだ後、退職した後の長い時間を意味あるものにする工夫が話題になっています。現在、ぼくの父母はそれぞれ木彫りの人形作りと墨絵に熱中しているようです。ぼくのパートナーも、数年前から陶器作りをはじめました。だから、ぼくは自分のホームページに彼らの作品を紹介するページを入れました。

学生たちがぼくの部屋でよくアクセスしているのは、放送局やレコード会社、あるいは人気タレントを抱えるプロダクションが作っているページです。彼らはテレビの人気番組を見て、よく売れている雑誌を読んで、ヒット曲を聴き、そこで十分親しんだ内容や人物の話題に、またインターネットで触れようとするのです。彼らの世界はきわめて閉塞したもののように思われます。多くの普通の人たちが作るホームページはよっぽどのがなければ、他人たちには覗かれる可能性の少ない世界です。それがどんなに氾濫しても、イ

ンターネットの可能性の妨げになるとは思えません。むしろ、そのようなものの中から新しい流れが生まれるのでは、という期待を持ちたいと思っています。

平野さんはゼミで「20世紀のメディアは人間の劣性に訴えたものが金銭的に成功する歴史のくり返しである」と話されたそうです。この「劣性」が何を意味しているのか定かではありませんが、ぼくも一応同意します。しかし、そこに「性」の問題が含まれるとしたら、それに対する評価については、ぼくは判断を留保しておきたいと考えます。

インターネットへの関心がかなりの部分、性に関連したものであることは、すでにぼくが実践的な紹介をしました。新しいメディアが社会に受け入れられる時に「性」に対する関心が引き金になるのは、ちょっと前のCD-ROMやビデオ、あるいは、電話の変身とダイヤル伝言板やダイヤルQ2の関係で経験済みです。そもそも、写真、いや絵画にしても、そこに女性の裸体を描きたい、見たいという欲望が強くあったことは、すでに多くの人によって指摘されていますし、浮世絵などはその好例だといえるでしょう。ぼくはこの新しいメディアが人びとに関心を持たれ、受容される過程のなかで果たした「性」の役割とその意味について関心があります。そしてその際、これは困った現象だが、といった枕詞をつけて論じることは避けたいと思います。

自分をどこで、だれに、どこまで、どんなふうに表示するか。インターネットはその仕方を誰もが経験的に学習できるいい機会になると思います。服部さん、それは必ずしも自分をさらけ出すことにはならないのではないのでしょうか。

@パソコンの勧め



服部：1週間ほど留守にしました。ニューヨークはもう冬の気配で、それなりに幻想的でしたよ。

さて、どうやらこれが最後のメールになるようですが、どういうふうに締め括ろうか迷っています。もっとも最終的な結論づけは渡辺先生任せですので、ほんとは私はここで何も語らないでもいいのでは、とも考えています。まあ、多少の感想を述べさせていただければ、この2回目の特集、褒め上手の平野先生に乗せられて、随分背伸びをしてしまった感じがします。大変恥ずかしい、というのが本音です。それと、大学の講義をただで受講してしまったような大変得をした思いが重なっています。

前回は私の口(キーボード)がすべて、こてんぱんにやつつけられてしまいましたが、私の理解は完全に逆だったことがよくわかりました。目にみえない何か、身の回りを無限に飛び交っているような気がして、不安だったのです(非科学的とはこのことです)。私なりにインターネットで話を締めさせていただきますが、平野先生の御教示で、このシステムの誕生のいきさつはわかりました。口のすべりついでに、言っちゃいますと、インターネットは、世界のどこからでも、誰でも発信できるのですから、つまり中心(?)はないわけです。中心がないのだから、政治権力に利用される確率も大変低いわけで、この点も私の理解(不安)はまるで逆でした。

ニューヨークで5、6人にインターネットをやっているか訊いてみたのですがやっているのは2人だけ。それも仕事がらみだと言うのです。家庭内への(趣味、遊びとしての)パソコンの普及度は日本の方が進んでいる、というのが彼らの感想です。ニューヨークはア

メリカではないという説もあるそうですが、全アメリカはどうなのかわかりませんが、インターネットには中心がないから、アメリカ人は嫌うんだろう、という私の下手なジョークが結構受けてしまいました。

<TABLE BORDER="4" WIDTH="50%" HEIGHT="50%"><TR><TD>

平野：編集長のおみやげ話、感激です。ご指摘の通り、インターネットは中心がなく、また今後とも出来ないように監視する必要と市民的義務があるのです。この回で締め括りということなので、理屈はやめて読者の方々に参考にしていただきたいことを端的に箇条書きにします。

1) 機械は買えるなら買うべきです。人の車をぶつけて凹ませるわけにはいかないが自分の車は凹んでも練習の内です。パソコンには他人を轢く心配がないので、積極的に壊すくらいのつもりがよいです。壊すとブラックボックスの中身が判ってきます。お金と時間は別途準備してください。また教えてくれる友人は大事にしましょう。

2) 渡辺さんのマッキントッシュ礼賛にひとこと。一般論としては、壊すと自分で手を出す余地のあるものがよいですが、マッキントッシュはほとんど手が出せないほど秘密主義です。多様な用途に使用するユーザーや、ショップ、ディーラー、メーカーたちの目が参加して練れているものがよいです。現在DOS/Vがその位置にあります。「日経バイト」および「スーパーアスキー」という雑誌が比較的全体状況をよく報告してくれます。

3) パソコンが誰でも手が届く風の宣伝ばかりし、またユーザーが中を覗かなくてもよいようにブラックボックス化する傾向があります。ブラックボックスを相手にする率が高くなるほど「中心が出来」ても市民には判ら



なくなる。日本の官僚機構がここまで困った存在になったのは、ブラックボックスだったからだということを思い出してください。

4) 前回「人間の劣性に訴える」という表現を使ったところ、渡辺さんから詰問されました。「その中に性は入っているのか?」。「劣性」とは人の弱みにつけこんで金を儲けることです。金を儲けたいと思うこと、言うことを聞かないとまずいんじゃないかと思うことが劣性です。セックスは入っていません。このことに関連して渡辺さんの「表現論」(広くは現代の表現論)にぼくは異論がありますが詳細は省略します。ぼくはインターネット表現メディア論に異論があるのです。

5) ぼくの言いたかったことは、インターネットにもし「中心が出来」とすると、政治的・行政的コントロールのような露骨な方法でなく経済的方法である可能性が高いですよ、ということです。これは、インターネット上で営業活動することを意味しません。それらは見えるからです。見えないところで動く金が恐ろしいのです。これは日本の全国民が現在経験中ではないでしょうか。

6) 「ニューヨークはアメリカにあらず」ではないですが、地方からの情報公開が増えるとうれしいですね。また地域的な意味の地方ばかりでなく、様々な人間活動の「地方」からの情報公開が増えるといいですね。そんな仕事をしている人がいるのだ、と。

7) 大都市に住むアメリカ人は、ほとんどどの大都市でも「XXはアメリカにあらず」といいます。この感覚は重要です。「東京(大阪etc.)は日本にあらず」とぼくらは思っているでしょうか。この表現をかつて耳にしたことがなく、耳にすれば日本人は奇異に感じるのではないのでしょうか。ぼくがインターネットがこうなってほしいと思っているのは、ああそ

うだ、東京(etc.)だけが日本じゃないんだと思えるようになることに、この手段が役に立ってくれることです。

8) 服部さん、上記のようなことなら家庭に進出しても恥ずかしくないのではないのでしょうか。渡辺さん、セックス表現を見せる見せないは個々の家庭の問題です。それは別にして、ぼくはセックスは「地方」だと思っているのですよ。

9) モータリゼーションが進み、欧米市場の力も借りて自動車が日本のものになるのに30年かかっています。パソコンはまだ3年です。自動車と道路の現状にユーザーも責任の一端を担っているとすると、パソコンもやがてそうなります。30年はかからないと思えますが、それなら、仕事であれ遊びであれぼくは読者の方々に早くユーザーとして参加していただきたいのです。あとから巻き込まれるのは、格好良くないし、決して得もしません。

<AREA SHAPE="POLYGON" COORDS=40,40,80,80" HREF="#">

渡辺: ホームページを11月に公開して、アクセス数が1日20ほどあります。鹿児島大学の先生から「卒論集を読みたいのだが」というメールをいただきました。面識はありませんが以前から引用をしたりされたりしていた社会学の研究者ともメールのやりとりをするようになりました。アメリカやカナダにいる友人から「見たよ」という返事ももらったのはちょっとした感激でした。数は多くはありませんが、新しい関係ができそうだという期待は感じさせてくれますし、距離や国境という垣根をほとんど無視したものであることに今さらながら驚いています。

しかし、「貴殿のホーム・ページにMicrosoft Internet Explorer ロゴ(ブラウザ・ダウンロードボタン)を貼り付けていただきます」と

いったメールが早くも舞い込んできてびっくりさせられてもいます。インターネットの世界は今、先行した「ネットスケープ社」と「マイクロソフト社」のシェア獲得の争いが行われています。こんなできたての小さなホームページにも攻勢の手が及ぶところを見ると、この戦いは相当に熾烈なものなのだと思います。まさにインターネットは埋蔵量が無尽蔵の新しい金鉱なのかもしれません。ぼくは心情的には反ビル・ゲイツですから、このお誘いはもちろん、無視しました。マックに批判的な平野さんも、パソコンやインターネットの世界を完全制覇しようとするマイクロソフトの戦略には抵抗なさるのではと思います。

コンピュータの中身に疎いぼくとしては、平野さんの指摘には今一つピンとこないところがあります。アップルのシェアは市場の1割を超えたことはありません。特色を持ったマイノリティのパソコンであることを考えれば、日本の官僚機構のブラックボックスと同列に置かれて説明されても、今一つわからない気がします。

ところで、平野さんのamazon.comの話を読みながら考えたことがあります。実はぼくが書いた本が一番新しいもの(94年)を除いてすべて品切れ状態になってます。もちろん売れ

ないせいですが、苦勞してまとめあげた本が数年のうちにそのような状態になってしまうのは、何とも残念です。永久にとは言いませんが、せめて十年ぐらいは必要なら手に入る状態であって欲しいと思っています。しかし現状では、新刊本は一年(あるいは六カ月)以内に売り切らなければ、増刷してもらえないし、断裁処分されたりしてしまいます。

そこで思いついたのですが、ぼくのホームページを見て、紹介している本を読みたいと思った人に、メールに添付する形で送るようにするという事です。あるいは、もし注文がポツポツとあるのなら、手作りの私家本を提供しようかとも。しかしそうであれば、出版社だって、増刷できない本でも、文字だけのテキスト・ファイルでインターネットを使って提供するサービスぐらいできるのではないのでしょうか。これはレイアウトや表紙づくりに本領を発揮する編集者には嫌われるかもしれません。しかし、本がすぐに品切れ状態になってしまったり、本屋で見つかり注文したりすることが簡単ではない現状では、ぜひ普及してほしい部分だと思うのです。『ホームエコノミカ』にバック・ナンバーの提供を主体にしたホームページができれば、ずいぶん便利になると思うのですが.....。

というわけで、2回目のメール対談もずいぶん話が盛り上がりました。

服部さん、Eメールを日常的な道具にすることができましたでしょうか。平野さん、硬派の役割ご苦勞様でした。実はぼくも軟派の役回りに少々疲れました。でも、また弥次喜多で何かやりましょう。もちろん、メディアはEメールです。恩田さんやそのほかの方々には、メール対談が無事済んだことを感謝しておきます。

p.s. 平野・渡辺のホームページに是非一度お訪ねください。